

明治維新と大分県

佐藤 節

一、はじめに

文久三年（一八六三）の正月元旦に、日出十五代藩主木下俊程が、「これを擬えて而して後に言い、これを議りて而して後に動く、擬議以てその変化を成す」という字を書き残しています。今、日出小学校の校長室に掲げてありますが、それを讀むと、木下俊程がどんな気持ちで書いたのだらうかということを考えます。これは、周の易經の文言らしいのですが、「これを擬えて」と言うのは、先人の言葉を推し量ってと言う意味のようであります。先人の言うことをよく調べてからはじめてもいい、「これを議りて」ですから、相談をしてからはじめて、その言うことが変化を成して行くのだ、と言うことが文久三年正月に書かれたのが、大変意義深いと考ええます。

二、二豊における尊王攘夷運動

日本に於ける尊王攘夷運動が高まりを見せてくるのが、文久二年ですから、それを受けて書かれたものだと考えます。大分県の尊王攘夷運動の一つの高まりは、文久二年にあります。御存知の方も多いと思いますが、岡藩士の小河一敏らが薩摩の島津久光の上洛に呼応して、尊王の挙兵を図るために上京します。小河一敏は、中山忠能の家臣の田中河内介だとか、真木和泉、或いは平野国臣、肥後の宮部鼎蔵らと計って、島津久光の上洛に合わせて倒幕運動を起こそうという計画をたてるわけです。そして、上京するわけですが、島津久光はそういった尊王攘夷運動を弾圧して、いわゆる寺田屋事件が起こるわけです。小河一敏らは、一日遅れて京都に入ったために難を逃れるわけですが、そのためにこの計画は挫折して、岡藩に捕らわれて閉門・謹慎を受けることとなります。大

分県で藩として勤王の運動を起こしたのは、岡藩だけだと言つてよいと思いますが、これ以後、岡藩は挫折します。

その中で、文久三年五月には、攘夷が実行されて、下関でアメリカの商船のベムブローク号が砲撃されますが、こういったことから次第に大分県の中でも動きが激しくなってきました。文久三年五月三十日には、姫島沖にアメリカ軍艦ワイオミング号が停泊して、姫島で野菜を買つたり、その反対側の伊美・八坂などでいろんなものを仕入れたということが、ちょうど今、朝日新聞の夕刊に連載されています『アーネスト佐藤日記抄―遠い崖』の記事の中にも出てきます。さらに、八月十八日に政変があり、勤王の公家さんたち七人が都落ちをしますが、その時の警備の方に佐伯出身の青木猛比古（たけひこ）―柏江茂八郎（かしわしげ）というのがその変名ですが、護衛の一員として長州に入っています。

それから、藩以外で言いますと、天領を中心として大分県の勤王の志士たちの動きがあったようですが、天領は全国で八百万石。その内、旗本・御家人の給料を払い

ますと、あと残った幕府の直接収入の対象になったのが、四百万石だと言われています。ここにはほとんど武士が居ませんから、合理的な政治をやっていたようで、五万石程度の天領で、大体十人から十五・六人の役人で治めていたようです。武士も居ませんので、比較的警備もゆるやかで、経済的にも豊かです。天領と言うのは、大体四公六民をずっと江戸時代守つてきて、最後は五公五民になったところもありますが、非常に豊かです。そのため、天領を中心とする庄屋層で勉強した人たちが、勤王運動に走ったと考えられます。この大分県でもそういう傾向が見られます。しかし、その他でいろんな人が出てきて、元治元年（一八六四）の禁門の変のときに、若杉直綱―この人は大分市の荏隈（しのがせ）出身で、大坂に出て医者をしていましたが、勤王の念にかられて長州に下つて長州藩の中で活躍して、福原越後の隊に属して戦死しています。そういう勤王の志士がポツリポツリと出てくるだけで、当時はまだ全体としてはまとまった動きはありません。

八月六日の長州藩に対する「四国連合艦隊」の下関砲

撃事件のときに、長三洲（光太郎）が奇兵隊の中隊長で参戦をして、負傷しています。長三洲という人は、この当時長州に入れ込んで活躍していたというくらいしか分かりません。長三洲の場合は、お父さんが英彦山の祐筆をしていて、勤王運動に早くから参加していたようです。また、加藤龍吉という人は、杵築藩の足輕出身のようで、早く脱藩をして遊撃隊に属して戦っているようです。この加藤龍吉は、かなり尊王攘夷に固まっていたようで、明治四年に大学南校の—後の東大ですが、ダラスという先生を斬ったというので、死刑になっています。

元治元年八月十三日に第一次長州征討令が出ますが、その時に直接大分県から参戦したのは中津藩兵で一千二百名が豊前黒原へ出兵しているようです。大分県で勤王運動が大きく動いていくのは、大体慶応元年（一八六五）からのようです。慶応元年一月には、井上聞多（馨）・春山花輔らが長州藩の過激派に斬られて、その療養のために別府の若松屋に来て、隠遁していたという話は皆様御存知だと思います。この中央公民館のすぐ裏に、その当時隠れていたという「千辛萬苦之場」が保存してある

のは、御存知の通りです。

四月一二日に第二次長州征討令がですが、五月に幕府は、姫島に石炭貯蔵庫を設置します。百二十万斤（約七三三トン）の石炭を貯蔵したと言われています。続いて五月二十五日に青木猛比古（猛彦）が、宇佐で「楠公会」を結成します。この青木猛比古は、元々は佐伯のお寺の坊主だったようで、若いとき寺を嫌って大坂に出て神官になり、京都の白川家に仕えて、そして勤王運動をさかんにやっていくわけです。宇佐へ来たのは、京都で知り合った宇佐八幡の神宮の時枝重明の手引きがあったと言われますが、ここで楠公が戦死した五月二十五日をもって「宇佐楠公会」を結成します。このときに中心になったのは、時枝重明・藤波茂樹・永弘岩根・小山田貞夫・吉成敏夫といった宇佐八幡の神宮に、国学者でありました佐田秀一（ひら）これは安心院の佐田の庄屋の倅で、杵築の綾部綱斎の弟子にあたります。それから、盲目の国学者柳田清雄、渡辺重石丸の道生館で学んだ松本大五郎—これは剣道の達人だったと言われています。それから、安心院の下村御鍛は帆足萬里の弟子であったようです。

そういったどちらかというと神官を中心としたグループに、佐田秀だとか柳田清雄―これは柳ヶ浦の人ですが、松本大五郎―これは宇佐の橋津出身の人で、それから下村御鍛、こういったグループがくっついて「宇佐楠公会」というのが結成されています。

それよりも前に、文久三年に下毛の神官であった高橋清臣きよおみ、それからこれは豊前の飯塚のやはり神官であった原田七郎こういった人たちが京都にいたわけです。京都で勤王の過激派である中山忠光の命を受けて、九州で倒幕の兵を挙げる計画を持ち帰って来るのですが、これは、中山忠光の大和拳兵が失敗したので、挫折をします。しかし、高橋清臣の義兄の太田包宗かねむね―これも神官ですが、こういった人たちとの間で次第に勤王運動が何とかならないだろうかと言うことで、動きがあるわけですが、それと「宇佐楠公会」とが結び付いていくのです。その中で大きな役割を果たしたのが、長三洲のようです。長三洲はこの頃からさかんに豊後や豊前をまわっては倒幕計画・勤王運動のオルグをしているようです。その中に入って来るのが矢田宏で、別府の石垣の出身です

が、矢田宏と長三洲の結びつきというのは、長三洲のお父さんが矢田塾で一時教鞭をとったことがあるので、それで仲が良くなったと言われています。また、長三洲も矢田宏もどちらも日田の咸宜園かんぎん出身ですので、そういった意味でも結び付きがあったのではないだろうかと思われまます。

次第にこういった勤王の動きが日田天領を中心に展開してきますと、日田天領では、農兵をつくって警備を進めようということでも最初につくられたのが、慶応元年七月二十六日に商人から一千両の献金を集めて、農兵百名を組織したのが起こりのようです。しかし、まだこの時には、制勝隊と名前は付いておりません。その目的の一つは天領を中心として活動している勤王の志士を抑えるためにつくられたと言われています。この十二月には、下毛の太田包宗・柳田清雄が捕まっています。

慶応二年六月七日にいわゆる第二次長州戦争が始まり、小倉での戦争がさかんになると、小倉の戦争を背後から応援する計画がとられます。いわゆる日田拳兵計画で、これが一番現実的なものだったようです。長三洲ら

がオルグ活動をさかんにするもの頃で、亀川の高橋敬一や鶴見の庄屋の直江哲太郎の家だとか、浜脇の永井楼などが長三洲の別府の拠点になっていたようです。直

江哲太郎の家では、その先生である杵築の元田直なましが呼ばれて、長三洲と会って何とか長州藩の応援をしようではないかと言うことになります。鉄砲やその他を長州藩に送る計画をたて、それがばれて謹慎になったという事件が起こります。その後第一次長州戦争のときに、長州藩の江戸屋敷を幕府が没収しますが、そのときに杵築藩が長州藩の恨みをかったという背景があったようです。いずれにしても、かなり別府がそう言ったオルグの拠点になっていたようです。それは、一つは天領は警備が手薄であったということによるのではないかと思います。

小倉戦争で九州の幕府方は総崩れとなり、八月一日に小倉藩が小倉城を焼いて香春かちんに撤退すると、日田は敗走兵で混乱しますが、西国郡代の窪田治部右衛門が農兵「制勝隊」を組織します。こういった中で、十月にかけて窪田治部右衛門は、大分県の天領に潜伏している倒幕勤王の志士たちの逮捕にふみきりますが、そのときに亀

川の高橋敬一や宇佐の時枝重明らは、日田に捕まって入獄しますし、佐田秀だとか矢田宏らは長州に逃亡しました。主として報国隊に逃げ込むわけです。

次第に勤王派の動きが激しくなり、天領は警備に不安だということ、天領の一部を久留米・島原藩に預けます。このとき、別府は寛政十一年（一七九九）以来島原領預り地であったのが、肥後藩に預け替えがされるわけです。島原藩というのはどうも遠いからということで、別府は大体肥後藩に、四日市―現在の宇佐は久留米藩、そして天草の方を肥後藩と島原藩に預け替えしたようです。当時、別府というのは現在の別府市で言うと二十三カ村ありますが、全部で一万三百五十五石あったようです。そのうち鶴見北中村と鶴見原中村は森藩領で、あとの二十一カ村が島原藩から肥後藩預けになったということになります。預け地替えの通知が来たのが五月五日で、預け地替えが六月一日で、海門寺に仮出張所を設けて、肥後藩から五十名程の警備兵が入ったようです。藩の預け替えというのは大変なことだったようで、鉄輪村では七月二十四日に喜藤次・喜太郎・喜市・喜三次というふ

うに喜という字が付いた男を全部呼び出して、肥後藩の若殿様である細川護久の名前が喜延で喜という字が使っている、全部名前を替えるというような命令が出されています。ですから藩主や藩の若殿様と同じ名前であったらいけない、百姓で同じ名前を使っている者は名前を替えさせられる程、藩というのは厳しかったようです。何とかこの預け替えて、日田天領の守備を固めたつもりだったんだと思います。

それから慶応三年には、まだ肥前・豊後を中心として勤王拳兵運動がさかんで、高橋清臣や原田七郎は京都に上り、部隊の隊長に花山院家理という人をいただいて勤王の兵を挙げることにします。船に乗りますが、その船の中で肥後藩士に気付かれ、大坂で捕まえられて日田に送られる途中殺されます。五月には、奥並継や藤波茂樹・安藤信哉らが宇佐で捕まり殺されますが、宇佐の同志たちは逃亡して以後、長州や岡山の方に逃げています。十月には、高橋敬一が日田へ入獄し、青木猛比古は京都で暗殺されています。

三、大政奉還と二豊諸藩主の勤静

こういう中で、十月十五日に大政奉還がなされます。これからは、二豊諸藩の動きが非常に激しくなる時代だと言つて良いと思います。慶応三年十月十五日には、朝廷は大政奉還を受け入れると同時に、朝廷は十万石以上の大名に京都に上るよう命令を出します。続いて十月二十一日に十万石以下の大名にも上京を命じますが、二十五日には上京の期限を十一月中ということにします。そこで、二豊諸藩はどういうふうに対応しただろうかということは、次頁の表を見ていただきたい。

当時、国元に居た殿様というのは、中津の奥平昌服、それに臼杵の稲葉久通、佐伯の毛利高謙、岡の中川久昭、森の久留嶋通靖です。この中で、奥平昌服は三年十一月二十九日に入京延期願いを出しています。これは、「維新史料綱要」にのっている分で、病気のためというのが理由です。それから、稲葉久通は同じく三年十一月二十一日に足を脱臼してまだ痛み、特に寒くなったらうずいて仕方がないから、代わりに重臣を名代として上京させるといふことで、十一月二十六日に片岡長佐衛門という家老が入京しています。それから、佐伯の毛利高謙

二豊諸藩主の動静

藩名	藩主名	藩主の所在	朝廷の上京命令に対する対応	藩主の上京	備考
中津	奥平 昌服 (昌邁)	国元 (江戸)	3. 11. 29 入京延期願(綱)	昌邁 4. 3. 30 大阪着(家) " 4. 3. 24 " (類)	慶4. 5 昌服隠居
杵築	松平 親良 (親貴)	江戸 (国元)		親貴 4. 1. 28 出発 2. 12 入京 (家)	慶4. 4 親良隠居
日出	木下 俊愿	江戸	3. 11. 17 病気のため延期願 (綱)	4. 1. 13 入京 (綱)	
府内	松平 近説 (大給)	江戸		4. 2. 23 入京 (家) 4. 3. 25 入京 (類)	若年寄
臼杵	稲葉 久通	国元	3. 11. 21 足脱臼のため重役名代 (綱) 3. 11. 11伺書(家)	4. 2. 28 出発 3. 18 入京 (家)	3. 12. 26 名代片岡長左衛門入京(家)
佐伯	毛利 高謙	国元	3. 12. 1 痔病のため重役名代 (綱) (家)	4. 2. 11入京 (復) 4. 3. 10入京 (類) 4. 2. 9出発(日誌)	3. 12. 26 名代間七郎右衛門入京(家)
岡	中川 久昭	国元	3. 12 病気のため延期願	4. 2. 16 岡発 (蹟) 3. 10 入京 (類)	
森	久留嶋通靖	国元		3. 11. 24 出発 12. 13 入京 (家)(復) 3. 12. 3 入京 (綱)	

注 (復) = 『復古記』 (綱) = 『維新史料綱要』 (類) = 『太政類典』
(日誌) = 『太政官日誌』 (家) = 『家記』 (蹟) = 『旧藩事蹟調』

は三年十二月一日痔病のために上京できないから、重臣を代わりに出すというので十二月二十六日に間七郎右衛門が入京しています。中川久昭は、久成という子供が居ますが、ちょうど將軍に会いに大坂に蒸気船で行ったのですが、大坂で指令をもらうとすぐそのまま引き返して、二人で相談して二人共病気になる、三年十二月に病気のため延期願いを出しております。久留嶋通靖は国元で、この人は一番早く出発するわけですが、一時やはり病気だという理由で延期願いを出しています。つまり、大分県の殿様は、全員病気になったということになります。裏返してみますと、どうして良いかわからないために、一時日和見的に病気になったという方が良いのではないかと思えます。

それから、江戸に居た殿様ではつきりしているのは枅築の松平親良で、この人は奏者番で、その前は寺社奉行でした。奏者番というのは秘書官みたいなもので、將軍に取り次ぎをする役目です。この人も、そのまま幕府の役人ですから、勤めていたようです。それから、日出の木下俊愿も江戸に居ます。江戸の警備を命じられていた

わけですが、朝廷からの命令を受けたときに家臣と相談をします。家臣の一宮松兵衛という人は、江戸の留守居役だったようですが、大政奉還というのは薩長の陰謀だから上京するには及ばないという意見を言うわけです。

それに対して麻生貞樹―大分師範の初代校長になった人だとか、滝廉太郎の父で滝吉弘という人がいますが、こういういった人たちはすみやかに上京すべきだという論をたたかわれて、どうしても話しがまとまらずに、一時病気ということ延期を願ひ出ます。しかし、比較的早くて、三年十二月に兵隊を率いて京都へ出発し、一月十三日に京都に入っているようです。木下俊愿が比較的早く動いたのは、木下俊愿の兄さんが山口藩の支藩に清末藩という一万石くらいの小さな藩がありますが、そこに養子に行つて毛利元純と申しまして帆足萬里のお弟子さんで、大変山口藩では期待をされた支藩の藩主だったようです。どうも、この人の勧めがあったようです。

それから、江戸に居ました松平（大給）近説―この人は大分県関係ではたった一人若年寄になった人で、今で言うところの大分県級です。なぜ、大給近説が若年寄になったか

と言うと、これはいろいろ考えなければならぬことがあります。寛政の改革の松平定信の孫ですが、むしろ大給近説よりも有名なのは弟で、老中筆頭の板倉勝静かつきよです。その引きで、どうも若年寄になったようです。この人はそのまま江戸に居たわけです。

一番最初に動き始めるのが久留嶋通靖で、三年十一月二十四日に出発をして、十二月十三日に入京しています。こういった殿様たちが本当に動き出すのは、鳥羽・伏見の戦いで、薩長軍が勝って幕府軍が負けてからです。中津奥平藩では、二月始めになり勤王方に付くことに決めて、大目付の古宇田与九郎という人が京都に探索に行くわけです。京都まで行ってみると、もう東征軍は出発している。中津の若殿様で昌邁まさゆきという人がいますが、江戸屋敷に居ましたので、幕府から押えられたら大変なことになるといので、古宇田与九郎が京都で早駕籠を雇い、東海道を一気に駆け上ります。江戸屋敷に三日三晩で着いて、すぐ若様を連れて横浜に逃げて、横浜から船に乗って大坂に逃げ出すということがあったようです。

それから、松平親良は慶応四年四月に隠居することに

決め、それより前に親貴ちかひが四年一月二十八日に京都に兵を率いて出発しています。この親良が江戸から引き上げるときに、箱根の峠で足留めをされます。そのとき、箱根の関所を守っていたのが森下景端かげたかで、後に大分県の初代県知事になった人です。この人は文久二年に足利尊氏の像を三条河原にさらした事件がありますが、そのときの一人で岡山県出身で、勤王の志士として早くから知られていたようです。明治維新のときには、神兵隊という農兵隊を組織して、箱根を守っていたようです。この人は、その他に黒住教の信者として、最後は黒住教の副管長になりましたが、黒住教の関係で松平親良が話しを聞いたことがあり、顔見知りだということでやっと許された、というような話もあります。

一番問題になったのは大給近説で、殿様は江戸に居るし、よその藩は全部勤王方に付いたといので、府内藩では大騒動になります。如何したら良いのかといので、一月二十八日に総登城ということになり、武士を全部集めて相談をしますが、そのときに三つの案がでます。一つは、殿様が若年寄なので、あくまで佐幕に勤め

ようという案です。次に、とにかく殿様に意見を聞くべきで、どんな困難なことがあっても江戸まで行って、殿様の指示を仰ぐのではないか、という案です。あと一つは、もうこの際殿様を隠居させてしまつて、勤王方に付くことではないかという案が出て相談をするわけです。しかし、遂にまとまらずに次の日にまた大評定をして城代増沢虎之丞という殿様の一族を仮の藩主にして、勤王方に付くことにやつと決まるわけです。三月に入つて、近説は若年寄を辞職して京都に詫びに行きますが、謹慎をさせられただけで比較的穩便に事が済んだようにあります。それは、松平近説は結核であまり政務を見なかつたというようなことが言われているのですが、必ずしもそうでもなかつたようです。この辺の動きについては、それぞれ記録によつて若干日付が違いますので、もっと詰りめなければならぬと思います。

四、御許山騒動と花山院隊

こういう中で、大分県で大きな事件が起こります、それが、いわゆる御許山騒動おもとやまといわれるもので、慶応四年一月十四日の夜中に、宇佐の四日市幕領四日市陣屋に六

十名ほどの浪士が襲つて、陣屋や四日市の東本願寺別院に放火をする事件です。大砲を四門ほど四日市陣屋にあつたものを奪つて、それを引いて一月十五日には、宇佐八幡に参り、宇佐八幡の奥宮と言われる御許山に錦の御旗を立てて、勤王挙兵を呼びかけます。この錦の御旗は、現在も安心院の重松家に残されていますが、これは三条美美さみみからもらったものだといふふうに言い伝えられています。盟主となつた花山院家理の名前をとつて、通称花山院隊と呼ばれています。高橋清臣や原田七郎が花山院擁立のために行くのですが、捕まつて暗殺されますので、その代わりに下村御敏が京都に上るわけです。下村御敏は京都で、咸宜園で同窓であつた児島長年こしま・児島備後介と言いますが、この人に会つて花山院を説いてくれるよう頼み承諾をもらつて、下村御敏は長州の方に帰ります。児島長年の口説きによつて、花山院家理が慶応三年十二月十日に周防国久賀村まで下向をして参ります。次第に勤王挙兵の計画が進められています、その挙兵の中心になつたのは長州の勤王の志士たちで、矢田宏だとか佐田秀といった人たちが中心だつたようです。そ

れに諸藩の浪人が加わって、福岡藩脱藩の桑原範蔵、或いは小藤四郎、それから秋田藩出身の小川潜蔵というような人々が加わって、次第に長州でなくって新しく別な所で一旗上げたい、という気運が高まってきたようです。それに、長州藩士の若月隼人―変名が平野四郎と言いますが、門人二十二名が加わって、花山院隊が結成されたようです。かなり前から計画をして、三年十二月五日には矢田宏・松本大五郎らが天草の富岡陣屋を襲って、八千三百兩余りの金を奪っています。これは、天草出身の庄屋で報國隊に身を寄せていた秋月五郎―中村蔵之助と言いますが、この人が天草の富岡陣屋に砲台を作るための金を一万兩ほど集めてあるというので、それを奪いに行くわけですが、どうもこの時に薩摩藩が手を貸していたのではないかと思われるふしがあります。

天草の富岡の記録を見ますと、蒸気船が天草の沖にやって来て、それから下りてきた連中が夜、天草陣屋を襲撃したという記録があるわけで、その蒸気船はどうも薩摩藩のものではなかったかと言われているのですが、これも謎のままです。奪われた金も一万兩とか八千三百兩

だとか、後に矢田宏らが捕まって取り調べをされたときに八千三百兩という金が出てきます。この八千三百兩のうち四千兩で長崎で武器を購入しています。あとの四千兩は藤林六郎―本名は小藤四郎と言いますが、報國隊の中のかなり幹部クラスで、これが長州藩に対して若干不満をもっていただけものだから、一旗上げる黒幕になっていたようで、これに渡したというわけですが、かなり綿密な計画をたてています。総裁としては花山院家理を頂いて、武器を購入するための軍資金は、天草の陣屋を襲って一万兩近くの金を奪って、それで長崎で武器を購入するわけです。軍資金も四千兩ほど総裁に担ぐ人に預けていたというのですから、かなり早くから豊後で、特に日田で勤王の挙兵をするというのは、二豊の勤王志士たちの念願であったようです。それが、二豊の地で計画に失敗して逃げ込んだ長州藩で働いていたところ、後に問題になる点が出てくるのではないかと思えます。

四月十三日に鳥羽・伏見で戦争に勝ったという知らせが長州藩に届きますが、その話しを聞いて一挙に長州藩

の報國隊を脱走して挙兵に踏切るわけですが、長州藩はその動きを察して、幹部の藤林六郎・小川潜蔵の両名を捕えて首を斬ります。花山院を迎えに行った矢田宏・加藤龍吉・島田虎雄―これは中津藩脱藩ですが、こういった連中は捕えられて獄に繋がれます。花山院を迎えにやっただけと帰って来ないというので、本隊の方は長州から柳ヶ浦を経て四日市の陣屋を襲って大げさに挙兵ということになるわけです。この御許山の挙兵については、入江先生などが脇屋文書だったと思いますが、活字にして出したものがあるので、読まれた方もあると思います。

これは大変ショックなことで、この話しがだんだん広がり百名という者もあれば大きく言うのでは三百名の兵が御許山で挙兵をした。そのバックは長州藩だということで近所の藩は皆ビビッてしまうのです。日出藩は藩境の山浦まで兵隊を出して偵察をします。それから杵築藩は、元田直が勤王の志士との関係があるというので状況を探りに行きます。また、佐田秀は佐田の出身ですが、自分の門下生を集めて御許山に行くというようなことがあります。当時の記録を見ると、いろんな情報が流れ

ています。その中で、やはり錦の御旗を立て陣屋を築いたとか、その他竹だとか縄だとかいろんなものを近くの村から徴集してそれで陣地を構えた、というようないろんな情報が各地で飛び交っているようです。

そういう中で一月二十日に報國隊一小隊とそれから長州藩兵が宇島に上陸をして、中津を経て四日市に入ります。当初は、御許山の軍側では花山院が来たのではないが、長州藩が応援に来たのだということ喜事で喜ぶんですが、そうではなくて上陸した報國隊や長州藩兵は、中津藩で大砲四門を借りて宇佐にやってきます。そして、宇佐でこれは勅許を得てない挙兵であるから許されない、無断で脱藩したのは隊規に背くからということで厳しく責められるわけです。その中で平野四郎(若月隼人)は、自分が長州藩士ですから脱藩をした責任は全部自分が持つということで切腹をします。佐田秀も同席をしていて、退出しようとしたところを後ろから斬り殺されます。そして御許山が攻撃され、次いで、「四日市強盗」という名の下に平野四郎・佐田秀、それから柴田直次郎という負傷をして捕まった男が首を斬られますが、この

三人の首をさらして、長州藩兵は引き上げて行きます。

これは、最初の偽官軍事事件だとして、最近注目をされています。後から赤報隊事件というのがありますが、これも前にも起こった事件です。

一方、一月十八日に花山院別動隊というのが天草の富岡に挙兵していますが、二十一日に薩摩藩兵が出兵したので引き上げています。この後どうなったかというのがよく分かってなかったのですが、最近いろんな史料を調べて見ると天草の富岡を引き上げてから、宇佐の御許山挙兵に合流するつもりで、こちらの方へ来るわけです。

ところが、もう御許山が壊滅したということが分かって、引き返す途中に香春で小笠原藩から討伐されています。やっと最近、こういう記録が分かりましたのでこれからもう少し調べたいと思います。この花山院隊長であった結城小太郎という人がいますが、これは今まで肥前長崎の浪人だと言われていましたが、どうも薩摩藩士のようにあります。先般鹿児島県の県立図書館で史料を調べてみたところ、結城小太郎というのは薩摩藩士で、小倉藩から薩摩藩に引渡された後に薩摩藩に切腹させられて

います。

どうも御許山騒動というのは、大きな騒動であった割合に後の始末がどうなったかということがよく分かりません。これまで、あまり深い追求もされていませんし、例えば矢田宏だとか、加藤龍吉・山本與一というような捕まった連中がいますが、そうさしたる刑罰に処せられたという記録もないし、先程言ったように八千三百両という大金を奪ったのにしては、それについての追求も余りされていないようなので、大変謎の多い事件です。これからもう少しいろんな史料を発掘していきながら、調べていかなければならないのではないかと思います。あと宇佐八幡が明治の初めに大分県に報告した記録があります。その中にいろんな人の名前が出てきますが、その人たちが捕まって後どういうような処分をされたかということとはほとんど書いていません。どうも見逃されたようで、何人か捕まったものが処分されたぐらいで、せいぜい獄に入れられたぐらいで、それも半年ぐらいで出されているようですから、どうもこの事件には薩摩藩との関係がかなりあって、薩摩藩が援助したために長州藩

が余り敵しい処分をしなかったのではないか。一方では、四日市強盗という汚名を着せながら処分してないのではないだろうかと思ひます。長州藩のいろんな記録は山口市の古文書館に残っていますので、もう少し綿密に調べたいと思ひますが、あすこにのっている限りではどうも処分関係は余り詳しくでてきません。ただ、平野四郎が連れて行った浪人二十二名はほとんどが町人だったようで、それも十五歳から二十一歳ぐらいまでの若い連中が主だったようです。平野四郎が剣道と柔道の先生をしていてそのお弟子さんたちを連れて行ったようです。

五、戊辰戦争と二豊諸藩

この騒動が済みますと、後は大分県がどういうふうな戊辰戦争に関わっていったかということになりますが、鳥羽・伏見の戦いでちょうど京都に出兵していたのは岡藩と森藩で、岡藩は慶応三年八月に京都猿ヶ辻番所の警備を命ぜられて、中川清太郎ら二十二名の兵隊を出しています。中川七万石と言ひますから、二十二名というのは大した数ではないわけですから。この兵隊が十二月十七日に正親町少将三条実愛の警護にあてられています。それ以

来、岡藩というのはこの東征大総督参謀三条実愛の護衛として関東から奥州に転戦をして、会津若松城の戦いの際に、会津藩主の松平容保を引き取りに行きますが、そのときの受け取りの軍監を勤めたのが、中村半治郎一後の桐野利秋です。この人が薩摩藩の将校として受け取りに行くわけですが、そのときに薩摩藩軍曹山県小太郎という人が出てきますが、これは岡藩士で、どうして薩摩藩軍曹となっていたのか分かりませんが、どうも薩摩藩の一隊の中に含まれていたのでないかと考えます。

森藩は慶応三年十二月十三日に藩主久留嶋通靖が兵隊を率いて上京しますが、四年一月四日鳥羽・伏見の戦いの際に徳大寺実則に十名さらに、穂波経度(つばな)に六名の護衛を出しています。それがやっとのようです。それから大坂に兵隊を出していた臼杵藩は、慶応二年十月に幕府の命令で大坂の木津川口へ八十五名が出兵していましたが、鳥羽・伏見の戦いには指をくわえて見ていたようで、何にもしていません。四年一月十日に朝廷の命令を受けて、京都の妙心寺へ移って京都の警備に当たっています。直接、戊辰戦争に参加したのは中津藩で、慶応四

年三月十九日に東進第二軍として出兵を命ぜられ、隊長山崎直衛以下百四十五名が大砲を引いて大坂を出発します。最初、駿府それから甲府とこの辺の戦いに参加して、次いで江戸から日光、さらに会津へ転戦します。会津若松城攻撃に参加しますが、やはり余り戦争をしたことがないというのが事実でして、日光で隊を二つに分けて隊長の山崎直衛他士族二十数名が日光の守備にあたります。物頭ものしらの猪飼太兵衛の率いる足軽隊が、会津に向かうことになります。「中津歴史」という本には、土族たちが死地に赴くのが恐かったので足軽をやったのだと書いてあります。同年十二月六日に中津に帰着しているようです。それから、杵築藩が駿府の警護の命令を受けて一小隊が出発をします。駿府まで行くと甲府の警備に配置替えを命じられて、九月九日から明治二年一月十一日まで甲府の警備にあたっています。その他、諸藩から徴兵して大体二万石について三名、各藩から兵隊を出させます。これは、どの藩も出した形になっていますが、どこでどういうふうに戦ったかというのは、今のところ杵築藩しか分かっていません。杵築藩の九名は徴兵五番隊に編入

されて、新発田しんぱつたから会津へ行って戦争をしています。これは、なぜ分かったかと言いますと、「太政官日誌」の中に杵築藩兵が負傷したという記録があるので分かった訳です。後日、もう少しいろんな記録を見ていかないと、現在のところ出ている史料からは、良く分からないということになります。いずれにしても、戊辰戦争というのは大変な戦争で、中には岡藩のように後から出兵命令が出たけれどもすでに京都で中川瀧太郎以下二十二名を、正親町少将の護衛につけてあるから良いではないかと言ったところが、朝廷の方が大変怒って罰金三万両を仰せつけられた、というような事件がありました。

六、藩政改革と豊後藩県会議

これが終わると、今度は版籍奉還が行われるわけです。薩長土肥が、明治二年一月二十日に版籍奉還を行います。これを聞いて各藩が版籍奉還をしますが、一番早いのは臼杵藩の二月二十日、日出藩が二月二十三日、森藩・府内藩が二月三十日、杵築藩・佐伯藩が三月四日、中津藩・岡藩が四月四日、これをいろいろ調べていきますと、日付が違うのがたくさん出てきます。例えば、岡

藩の記録の中には三月に版籍奉還をしたという記録もあります。どうもこの版籍奉還というのは、領地を一度返してその後再分割をせよという狙いがあったのだという話があります。そのために、我先に版籍奉還して後またわけてもらおう、そのためには早くした方が良いというので、藩主が知らないうちに出先の京都の役人がしたのではないかと思われるふしもあります。

版籍奉還に次いで、藩政改革がそれぞれの藩に発せられます。これは、諸務変革をなすというもので、家臣の俸禄の引き下げが行なわれます。さらに兵制の改革で現石一萬石につき一小隊で、家臣の俸禄の引き下げというのは大変厳しいもので、日出藩は明治二年に等級を分けて上士・中士・下士・準下士・卒で、卒が一等から四等までです。二百石以上で、実際にもらえるのが三十石。その中でも借り上げがさらに四、二百石ですから、二百石以上の侍でも実際の収入というのは二十六石余り。さらに、それが最後の禄制改革によると、これは明治四年になりますが一千二十八石というのは殿様ですが、一番多いので十七、五十―これが五十七人で旧上士です。旧中

士は十一石―これが八十人、七石というのが三十人、こういうふうに変革しい禄制改革が行われているわけです。これが元になって、今度は秩禄処分が行われるわけで、実際に三百石とったとか百石とったとか言いますが、百石取りの場合、正式には年に四つですから四十石が元々の貰い高なのです。それがだんだん年を追って減ってきて、最後にはそういうふうになって来る。ですから、日出藩でも明治維新の頃は、ご家老さんでもお粥しか食べられなかったということを聞いております。

そういう中で、豊後藩県会議というのが開かれるが、明治三年二月それぞれの藩が協議して豊後で時勢に乗り遅れないようにということで、会議を開こうと森藩の直江精一郎―これは森藩の鶴見の庄屋だった人で、それに熊本藩の沢春三―これは中村六蔵というのが本名で、いろんな暗殺事件に関係したりしています。この人も大変な勤王の志士であったということです。それから岡藩の吉田肇が中心となって、第一回豊後藩県会議というのを岡藩で開きます。しかし、二回以後熊本藩と日田県が不参加で、第二回は臼杵、第三回は杵築、第四回は日出で

行われますが、これはどうも新政府に対して妙な動きがある、というので後に中止をさせられます。

七、維新後の農民一揆

そこで、新政府に対する反発やいろんな動きも起こってくるわけで、まず、明治二年の岡藩一揆というのがあります。これは七月七日に朽網郷くたみで農民が蜂起をして大體二万から三万人が参加して七月十三日に終息しています。この岡藩一揆の起こった原因というのは、岡藩と肥後藩が共同で幕末に九重山の硫黄を採取していました。

九重山の硫黄は火薬に使うわけで、昔から九重山をあたると山の神の崇りがあると言われていたのですが、明治二年の七月に朽網郷を中心として大洪水があって稲の出来が良くない。どうもこれは九重山の山の神が祟ったというので、大騒動したようです。このときに、新しい時代になって年貢が増えるというのはけしからん、というような要求もありました。

明治三年に日田県一揆というのがあります。いわゆる竹槍騒動で、これには少し背景があって、明治三年一月に山口藩の諸隊が反乱を起こします。これは、長州藩が

明治維新を勝ち抜くためにたくさんの諸隊をつくるわけです。奇兵隊から第二奇兵隊とか、報国隊などのたくさんの隊をつくります。そして維新戦争を戦い抜いて帰って来たたら、そういった隊がいらなくなつて、解散されるわけです。このときの扱いが悪いというので、山口藩の諸隊が反乱を起こして鎮圧されるのですが、そのとき
の首謀者の一人が大楽源太郎だらくという人が、豊後へ逃亡します。最初姫島、それから鶴崎、そして岡を通つて久留米の方に逃げて行きます。この大楽源太郎が、豊後で失地回復の運動を起こすというようなことがあって、明治三年十一月十六日に久留米藩の藩士が日田県の役所に来て、挙動不審な者を捕まえたたら、日田で反政府の挙兵計画―それは、大楽源太郎の一派とそれから秋月藩とか、豊津藩だとかそういうところの不平分子たちが日田で挙兵する動きがあるということを報告に来る訳です。それが十一月十四日ですが、十六日に日田県が警備をしていたら、日田の旅館に泊まっていた挙動不審の男たちを捕まえ、これを調べたら挙兵計画が発覚し、それで警戒をしているうちに、五馬いづまのお宮で農民たちが集ま

っているというので農兵が行きますが、そこで衝突事件が起こります。すぐ一帯に農民一揆が拡大するわけで、その一つのきっかけとなったのは肥後藩が年貢を安くするのですが、それに準じて日田県も年貢を安くせよ、これ以上もう年貢を上げないで欲しいというので、そのときの旗印になったのが「御一新新運上お断り」というものです。七千人が参加をして、このときに亀川出身で日田県の大属だいきんになっていいた高橋敬一が竹槍で突き殺されてしまいます。

十一月二十一日に鎮静しますが、これが飛び火して府内藩の庄内で一揆を起こします。十二月五日に府内城に押し掛けて、要求を通すわけですが十二月十五日に鎮静します。それをうけて十二月十五日に日田県の庄内で一揆が起こり、直入・由布院を経て別府に押し掛けて、これは別府での明治の農民一揆としてよく知られている事件です。さらに今度は、十二月十九日には日出藩の山香に飛び火して一揆が起こります。このときの一揆は、どれも一応成功しています。後に、全部破棄されますが一応年貢を安くさせることには成功しているようです。

のもとになったのはやはり大栗源太郎が豊後に持ち込んだ反政府運動だと言って良いと思います。

こういの中で、密偵暗殺事件というのが起こっています。それは、肥後藩鶴崎の藩兵の隊長に高田源兵衛という人がいますが、これが大栗源太郎と関係があるというので、沢田衛守—これは土佐藩出身の三条実美の密偵だったと言われていますが、これが探索に来ます。それに気がついて高田源兵衛の下にいた沢春三と山本與一—これは長州出身の花山隊員の生残りですが、それに別府の矢田宏の三人が追いかけてまわして宇佐の御許山のところ暗殺をするという事件。さらには、日向屋事件というのがあって別府村楠浜の日向屋に五人の脱走兵が宿泊していたのを逮捕した、という事件が五月二十八日に起こっています。このときは、脱走兵がピストルを撃ったというので大変評判になったようです。大栗騒動の結末がいつのが、明治四年三月から五月までの間で、久留米藩を中心に日田に出張した四条少将が中心になって処刑をするわけです。二豊出身者で四十二名の処刑者がでています。そして日田に西海道鎮台の分営がおかれるよう

になるわけです。

いずれにしても、明治二年から三年というのは、大變農民一揆とか反政府運動がさかんに行われた時代のようで、その中心になったのが尊王攘夷運動をやった連中であつたようです。一つは、高田源兵衛もそうですが、尊王攘夷運動で突っ走ってきた連中が、明治になって開國に政府が踏み切つたことに対する不満、或いは年貢が安くならなかつたことに対する不満などいろいろなもの積み重なつていようです。

八、おわりに

大分県は明治四年十一月十四日に豊後八郡として出發します。当時はまだ、国東・海部が分かれていないので、国東・速見・大分・海部・大野・直入・玖珠・日田の八郡で、十七町一千八百一村で五十六万二千五百五十六人というのが大分県の出発のようです。岡山県大參事であつた森下景端が、大分県參事として五年一月十八日に着任して、大分市の今の都町のところにあつた旧本陣の酢屋一幸松平三郎の家に仮県庁を開いたのが始めです。

最初に出來た県庁というのは、四課十七係で約百名の役

人で發足しているようで、それ以後大分県は次第に發展していくわけです。

私たちが旧制中学校、或いは高等学校で習つた歴史の本には、廢藩置県についてこういうことが書いてあります。県には県令をおき、權令をおいたと書いてあります。よく調べてみると一等県には県令をおいて二等県には權令をおいて、三等県には參事をおいたようであります。ですから、大分県は出發当時から三等県であつたと言つて良いのではないかと思います。各県大体四十万石から五十万石を目当てに県をおいています。そこで、少し気になることは、大分県人としてどういふ人たちが明治の初年に、県知事やその他に任命をされたらうかということとです。まだ、詳しいさういつた一覽表ができていません。最近、「明治史料顕要職務補任録」といふ本が出たので、それにのつている大分県人を全部拾ひ上げて一覽表を作つてみたいと思つて仕事にとりかかっています。

明治の初めですと、岡藩小河一敏は堺県知事になつています。明治元年六月二十二日になつていますが、これが最も早い大分県出身の県知事だと言つて良い

と思います。それから、水城龍という人が三河県の知事になったのが、明治元年七月二十日です。この人は、大分県では「大分県偉人伝」その他では、水城龍という名前が出てきません。秋月橋門あきづかきという名前で佐伯出身です。佐伯の前は延岡藩で水城奇という名前で出てきます。そのミズキは水城と書いてありますが、下総知縣事時代は水に筑前の筑を書いてあります。その次に、佐伯の矢野光儀みつよしは、葛飾県知事になっています。それから、明治四年までになったのでは島惟精しまいせいが盛岡県知事です。

非常に大分県は少ないということが言えると思います。明治二十二年つまり議会が出来るまでに大分県人などのくらしい政府の要職に登用されているかということも調べてみたいと思います。

これについてもいろいろ調べなければならぬことがあって、十三年三月三十日に太政官少書記官であった秋月新太郎という人がいますが、これは補任録によりますと日出藩士と書いてあり、日出藩士に秋月新太郎というが出てこないのかおかしいと思って、平凡社の「大人名事典」をひいてみたら、臼杵藩士と書いてあります。

臼杵藩のいろんな記録を見ても秋月新太郎という名は出てきません。他のことで日出藩のことを調べていて、米良東嶠めつとうきょうのお弟子さんの中に佐伯藩士秋月新太郎という名が出てきます。どうも佐伯藩士が本当のようです。後に、東京女子高等師範学校の校長になりますが、かなり的人物だったのだらうと思います。こういった人たちがどういう経過をたどって明治政府の中に入ったのか。例えば、小河一敏は確かに勤王の志士として古くから知られた人で、薩摩藩や肥後藩その他に知人が多かったようです。水城龍がどうしてこういうふうになんか早く知事になれたのか、或いは矢野光儀や島惟精はどうしてか、ということもそれぞれもう少し各藩との関係も調べていかなくてはならないと思います。或いは、そういった人たちが隠れた勤王運動をどういうふうにしていたか、どういう人となりがあったのか。なにせ、百年ちょっと前のことですが、分からないことがまだまだたくさんあります。もう少し本格的に調べて、一つ一つ探っていかなければならないということを考えています。

(文責・二宮徳夫)